

「病跡学の 3つの可能性」

鈴木貴之
(東京大学大学院総合文化研究科)
スライドは <http://tkykszk.net>

1

1 病跡学的研究に対する批判

2 3つの可能性

3 考察

2

批判①：Schlesinger 2009

- 先行研究にはさまざまな方法論的問題がある。
 - 少数の逸話的サンプルに依拠。
 - 創造性や精神疾患の定義が不明確。
 - 相関関係の解明にとどまる。



3

批判②：Dietrich 2014

- 従来の研究は的外れ。
 - 天才と精神疾患を関連づける見方はさまざまな認知バイアスの産物。



4

1 病跡学的研究に対する批判

2 3つの可能性

3 考察

5

可能性①：一般性の追求

- 事例主義から脱却し、精神疾患と創造性の一般的な関係を探求する。

6

可能性①：具体的には...

- 対象領域の拡大
 - 統合失調症→気分障害、パーソナリティ障害、発達障害
 - 精神疾患→パーソナリティ特性
 - 芸術→その他の創造性

7

- 統計的手法の導入
- 他分野との連携
 - 心理学、認知神経科学、遺伝学...

8

可能性①：利点

- 扱うことのできる問い
 - 精神疾患と創造性に本質的な関係はあるか？
 - 一方が他方の原因なのか、共通の原因が存在するか？

9

- どのような精神疾患とどのような能力に関係があるのか？
- 両者の関係は一部の天才だけに見られるものか？
- 両者の関係は病理的なレベルの人だけにみられるものか？
- 両者の関係は芸術だけに見られるものか？

10

可能性①：成果

- 統合失調症以外の精神疾患
 - Schuldberg 2001：うつ病と創造性は負の相関を示す。
- パーソナリティ特性
 - Bass et al. 2016：統合失調・双極性傾向は創造性と正の相関を示し、不安・抑鬱傾向は負の相関を示す。

11

- 統計的手法
 - Kyaga et al. 2011：創造的な職業には、双極性障害の人や統合失調症または双極性障害の血縁者がいる人が多い。
- 認知神経科学
 - Fisher 2004：統合失調型パーソナリティは創造性と正の相関を示し、右前頭前野の活動増加が見られる。

12

- モデル

- Carson 2011：創造性と精神病理には共通の生物学的要因がある。
- Abraham 2014：トップダウン制御と創造性の関係は逆U字型。

13

可能性①：科学哲学の観点からみると...

- イムレ・ラカトシュの研究・プログラム論
- リサーチ・プログラム=ある科学理論の総体。堅い核と防御帯という2つの要素からなる。
 - **堅い核**：基本法則など。修正不可。
 - **防御帯**：定数、初期条件、補助仮説など。修正可。

14

- 前進的なりサーチ・プログラム：

- あらたな予測を生みだし、それがのちに確認される。
- 防御帯の修正によって堅い核は維持される。



15

→一般性を追求するアプローチは、前進的なりサーチ・プログラムになりうるのでは？

16

可能性①：問題点

- 課題

- 創造性の定義 (Abraham 2013; Thys et al. 2014; Fisher 2015)
- 相反する研究結果

17

- 病跡学の役割は？

- 認知神経科学における脳損傷事例のようなもの？
- 病理的レベルの状態で創造性は高まるのか？

18

可能性②：個別性の追求

- 個性記述学としての病跡学

19

宮本志雄「バトグラフィー研究の諸問題」

「やはりそれ [=クレッチュマーの研究] だけでは、天才人の性格あるいは作品の「形相」をあくまでも類型学的にとらえるのみで、BiosをBiosたらしめる個人の歴史的生成の把握を欠き、したがってどこまでいっても**ある単独者の個別的世界の描出**にはいたらない。これは分類をいくら細分していっても同様である。」（宮本 1997、p.28）



20

「もともとバトグラフィーはあくまでも「個人的なもの」「一回的なもの」にかかわる学である。こうした「個人的なもの」「一回的なもの」をその特殊性においてとらえることをめざす体系は、ヴィンデルバントにより普遍的法則の認識をめざす**法則定立学**にたいして**個性記述学**として構想され、また彼に引きつづいてリッケルトにより自然科学にたいする文化科学として指定されている。」（宮本 1997、pp.31-32）

21

福島章「病跡学とは何か」

「これまで、病跡学は、精神医学の一応用領域と考えられてきた。しかし、これは現実には正当でない。病跡学は、独自の方法論を持った、独自の研究領域・科学であるべきである。なぜなら、医学・自然科学の一部門としての精神医学が**法則定立的な方法論**を、少なくとも一定の範囲で持つことを課せられているとするなら、これは、すぐれて**個性記述的な性格**を持つ病跡学とは方向を異にするであろう。」（福島 1984、p.307）



22

可能性②：問題点

- 病跡学は具体的にはどのような営みとなるのか？
 - 「精神病理学者は一人一人の人間ではなく一般的なものの存在を知り、その性質を知り、それを分析しようとする。」（ヤスパース 1913/1971、p.13）

23

- ある研究の良し悪しをどう評価すればよいのか？
- 天才と精神疾患に一般的な関係があることは、病跡学の基本主張の1つでは？

24

可能性③：一般性と個別性の統合？

- 2つのアプローチの統合としての病跡学

25

宮本忠雄「パトグラフィー研究の諸問題」

「心理学や精神医学が文化科学的側面をもつことはこんにちではむしろ常識であり、すなわち、自然科学のように、個別的なものから一般的なものへむかって現象の一般的法則を発見すると同時に、特殊なもの・個人的なもの・歴史的なものにも立ちむかわざるをえない。このような、**両者の対立的性格をもっともつよく帯びている領域のひとつがパトグラフィーである**。なぜなら、病誌の対象となる人物の疾患の認識、いわば「人間における病」の認識はもっぱら自然科学的還元の方法にもとづくが、しかしパトグラフィーとしてはさらに「病める人間」のあり方を認識するというより本質的な課題が課せられており、これはむしろ歴史科学的の接近を必要とするからである。」（宮本 1997、p.32）

26

「では、これら両種の認識はどのように統合すべきだろうか？この問いは、精神生活の全体を把握するにあたってヤスバースがこころみた構想につながる。...こうした観点から右に述べた各種の病誌的方法をみなおしてみると、疾病学・形相学・伝記学の三つの契機のうちどれをどの程度ふくむかによって位置づけることができる。いいかえると、既述の諸方法はしだいにその探索の領域を拡充しつつあるようにみえるが、**それら領域を統一するに足る原理がなお欠けている**とも考えられよう。」（宮本 1997、pp.32-33）

27

「人間の多様性を指向するこのようないわば次元的人間像にたいして、その統一性を指向する一元論的人間像を提出しているもののひとつに現存在分析があり、たとえばわれわれはピンスワンガーの、身体と心を総括した「生命機能」と精神の展開としての「内的生活史」の対比的構想のうちに精神医学の固有の対象としての人間または人格の全体的理念を確認する。...ここでは、従来欠けていた**パトグラフィーの統合的理念**がある程度まで示唆されていることを強調しておきたい。」（宮本 1997、p.33）

28

可能性③：問題点

- これはどのような営みでありうるのか？
 - 法則定立学と個性記述学は両立しうるのか？
 - 疾病学・形相学・伝記学の統合と、法則定立学と個性記述学の統合の関係は？

29

1 病跡学的研究に対する批判

2 3つの可能性

3 考察

30

考察

- 発表者は可能性①が進むべき道だと考えるが...
 - 後退的なリサーチ・プログラムになる可能性
 - 病跡学が重要な役割を果たさなくなる可能性

31

- 可能性①では捉えられないものとは？
- 病跡学の問題か、精神医学の問題か？

32

• 病跡学の社会学？

- Becker 2001 : 病跡学は天才に関するロマン主義の産物？

33

参考文献

Abraham, A. (2013) The Promises and Perils of the Neuroscience of Creativity. *Frontiers in Human Neuroscience*. 7: Article 246.

Abraham, A. (2014) Is There an Inverted-U Relationship between Creativity and Psychopathology? *Frontiers in Psychology*. 5: Article 730.

Bass, M., Nijstad, B., Boot, N., and De Dreu, C. (2016) Mad Genius Revisited: Vulnerability to Psychopathology, Behavioral Approach-Avoidance, and Creativity. *Psychological Bulletin*. 142(6): 668-692.

Becker, G. (2001) The Association of Creativity and Psychopathology: Its Cultural-Historical Origins. *Creativity Research Journal*. 13(1): 45-53.

34

Carson, S. (2011) Creativity and Psychopathology: A Shared Vulnerability Model. *Canadian Journal of Psychiatry*. 56(3): 144-153.

Dietrich, A. (2014) The Mythconception of the Mad Genius. *Frontiers in Psychology*. 5: Article 79.

Fisher, J., Mohanty, A., Herrington, J., Koven, N., Miller, G., and Heller, W. (2004) Neuropsychological Evidence for Dimensional Schizotypy: Implications for Creativity and Psychopathology. *Journal of Research in Personality*. 38: 24-31.

Fisher, J. (2015) Challenges in Determining Whether Creativity and Mental Illness are Associated. *Frontiers in Psychology*. 6: Article 163.

35

Kyaga, S., Lichtenstein, P., Boman, M., Hultman, C., Langstrom, N., and Landen, M. (2011) Creativity and Mental Disorder: Family Study of 300,000 People with Severe Mental Disorder. *The British Journal of Psychiatry*. 199: 373-379.

Schlesinger, J. (2009) Creative Mythconceptions: A Closer Look at the Evidence for the "Mad Genius" Hypothesis. *Psychology of Aesthetics, Creativity, and the Arts*. 3(2): 62-72.

Schulberg, D. (2001) Six Subclinical Spectrum Traits in Normal Creativity. *Creativity Research Journal*. 13(1): 5-16.

Thys, E., Sabbe, B., and De Hart, M. (2014) The Assessment of Creativity in Creativity/Psychopathology Research - A Systematic Review. *Cognitive Neuropsychiatry*. 19(4): 359-377.

36

福島章 『続 天才の精神分析』 新曜社、1984年

宮本忠雄 『病跡研究集成—創造と表現の精神病理』 金剛出版、1997年

カール・ヤスパース 『精神病理学原論』 みすず書房、1971年